

各関係機関長 様

高知県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について

平成24年度病害虫発生予察特殊報第1号を送付します。

平成24年度病害虫発生予察特殊報第1号

1. 病名 **ナスフザリウム立枯病（仮称）**

2. 病原菌 *Fusarium striatum* (*Haematonectria ipomoeae*)

3. 発生作物 ナス

4. 発生経過

平成23年5月、高知県の施設栽培ナスで、茎の途中が淡褐色にくびれて、萎凋・枯死する株が見られた。高知県農業技術センターによる菌の分離と接種試験および独立行政法人森林総合研究所による菌の同定の結果、*Fusarium striatum* (*Haematonectria ipomoeae*)による病害であることが確認された。

本病原菌は、トマトの立枯病を引き起こす病原菌として知られているが、我が国でナスに対する病原性が確認されたのは初めてである。

5. 病徴

一部の葉が水分を失って緑色を保ったままおれる。このような株の基部には表皮のひび割れ、陥没が認められ、表面に赤い小粒（子のう殻）が形成されている場合が多い（図—1～3）。症状が進むと枯死することがあるが（図—4）、萎凋から枯死までには、かなりの時間を要する場合が多い。枝に発生する場合もあり、枝の表面が黒褐色に変色し、発病部より先は枯死する。

6. 病原菌の形態・性質

糸状菌の1種で子のう菌類に分類される。

子のう殻中に子のう胞子を形成する他、分生子と厚膜胞子を形成する。子のう殻は赤褐色で紡錘形の子のうを含みその中に無色隔壁の子のう胞子を形成する。分生子は無色長楕円形の小分生子と無色鎌形で1～5隔壁を有する大分生子を生ずる。厚膜胞子は球形である。生育適温は25～30℃で高温多湿条件を好むと考えられる。

7. 伝染方法

伝搬様式ははっきりわかっていないが、土壌中に残った病原菌が感染源になると考えられ、発病後は形成された分生子や子のう胞子の飛散により、二次伝染が起こると思われる。

8. 防除対策

(1) 土壌くん蒸剤や太陽熱利用による土壌消毒を実施し、第一次伝染源となる病原菌密度を低下させる。

(2) 過度の灌水を避けるとともに、暗きよなどを設けて、ほ場の排水をよくする。

(3) 発病株は伝染源となるため、発見後は直ちに取り除き、圃場内および野外に放置しないよう注意して、適正に処分する。

お問合せは、病害虫防除所(担当:平田、榎本 TEL 088-863-1132)または環境農業推進課(担当:朝比奈 TEL 088-821-4861)まで



写真一1 株元に発生した子のう殻



写真一2 子のう殻の拡大写真



図一3 障害部はやや陥没する



図一4 本病害により枯死した株